

統合される時間, 分散する時間, 時間の“virtuous attachment” —— *The Ambassadors*におけるStretherの現在認識

西 田 智 子

序

The Ambassadors (1903) の中でヨーロッパに到着したLambert Stretherは、自分の人生が不本意な運命に弄ばれてきたという思いに独特の執着を抱く人物として登場する。そのため彼のとらえる時間や人生は、まるで人間とは別に存在する他者的なものとして、また時には擬人化され人間に何らかの働き掛けをする存在として描写される傾向がある。そこには、不本意な過去の人生経験を、何か自分とは他のもののせいにしてしようとする彼の弱さや自己弁護も多少あると考えられるかもしれない。だが、彼が他者の経験する時間に対してさえもやはり物体化した時間のイメージを抱く心理は、彼の自己弁護の心理だけで説明できるものではないといえよう。例えばStretherの人生は、自分がその中で何かをつかむのではなく、時間によって彼自身が何らかの目的のために保管されると表現される (“to be kept” “Kept for something” 63)¹。またChadを変えたヨーロッパでの時間は人間を“待つ”運命であり (“the fate that waits for one” 105), 策略 (“plot” 105) を仕掛ける人生であるとStretherは語る。そして彼がlittle Bilhamに語るものは、人を待ったり遠ざかって行ったりする汽車 (“train” 132) や、形を取るブリキの型 (“tin mould” 132) に入れられる流動物に譬えられる物体化された時間である。こういった他者性を持つ時間や人生のとらえ方自体は、従来、常に傍観者的立場を保ち、メタレベルから人生そのものさえも眺めようとするHenry James姿勢の特徴を反映するものであるとして議論されてきた。

しかし時間とは元来、人間の主観の働きによってとらえられるものであり、それゆえ時間と人間の存在の意味は決して切り離して考えられるものではないと考えられる。Martin Heideggerは、時間は古来人間の心のあり方と結びついて考えられたのであり、時間の問題とはすなわち人間の在り方の問題に他ならないとする。つまり時間とはそれをとらえる人間の人格に他ならないといえよう。そうするとStretherの時間観は、彼自身の存在の意味を反映すると考えられる。この作品においてStretherの時間経験は、二つの文化圏において彼が感じた時間観だけでなく、他人の時間の身代わり経験や、若返りの経験、そして新たな時間観の発見など、多彩な側面から語られる。

Stretherの時間へのオブセッションについてはAllen W. Mentonも“Strether’s obsession with time lies at the heart of *The Ambassadors*.” (Menton, 295) と指摘する。そしてこのStretherの時間経験の多彩さは、傍観されメタレベルから眺められる人生と従来とらえられがちであったJamesの時間観が、この作品においてある種の変貌と成熟を遂げていることを暗示すると考えられる。

Mrs. Newsomeとの結婚を条件としてChadをアメリカに連れ戻すためにパリへとやってきたStretherは、Chadの友人litte Bilhamによって“virtuous attachment” (112) と表現されるChadとMadame de Vionnetの親交を知り、二人の関係はStretherが経験する異種の時間の出会いの意味を囚らずも体現すると考えられる。“virtuous”であるとは、プラトニックであるという、後にアイロニカルなニュアンスを備える語義に加えて、道徳的に高いレベルであり、高潔であるという意味を表す。そして時間観はすなわち人格を意味するという本稿における議論に従えば、人格において高尚であることを意味する“virtuous”という概念は、つまり、時間をとらえる感覚において優れると言う意味も備えるものとして解釈することができる。そうすると“virtuous attachment”とはStretherに、彼の経験する時間を吟味し、彼のアイデンティティーを見極めるための、より高い見地をもたらす、異種の時間観の接合の表象であると考えられる。ChadとMadame de Vionnetの関係が現実にはどういったものであるかにかかわらず、“virtuous attachment”という関係の中にStretherが見出した理想や幻滅はそれまでの彼の人生観を揺るがす時間意識を彼にもたらす。

本稿では、従来、男女の関係について用いられ、また議論されてきた、“virtuous attachment”という概念を、Stretherが経験する異種の時間観の存在とその出会いの意味として読み解くことにより、異種の時間観、そして異種の文化をさまよう彼にもたらされる「生」と「現在」という時間の意味、そしてそこに重なるJamesの時間意識について考察していきたい。

I

WoollettでStretherが歩んできた人生は、家族を失った不幸を引きずり、社会的な成功に欠ける、彼にとって不本意なものとして語られる。Mrs. Newsome一家との関係を自分の人生の「すべて」(“Everything” 56) とするStretherにとって、彼の意志にそぐわない人生は、まるで彼のものではないように感じられる²。彼は、何か外部の力によって押し付けられた時間に、諦めと忍従をもって調和を強いられていると感ずるのである。ここで彼を取り巻く社会が生み出す時間観の中で、彼の意志とは無関係に

運命的に流れる時間を“外部時間”として、また彼の意識の中で、彼が自ら時間を使って生きていくと感ずる時間を“内部時間”として定義し、区別するのなら、彼の外部時間は内部時間を押しつぶしていると考えられる。不本意な時間そのものの存在を再確認し、自分取るに足りない人間であると自嘲することだけが、彼の存在の主張であり、自分からすべてを奪った不可抗力的な時間に対する精一杯の反発であるといえる。こうしたStretherの時間意識は抑圧された彼の変身願望もまた暗示する。

Stretherに社会との唯一の接点を与えているNewsome家の人々もまた、Woollettひいては当時のアメリカ社会に浸透する独特の時間意識の束縛のもとに生きている。Mrs. NewsomeはStretherによると非常に忙しく、病人(“invalid” 46)になっても、事業の実績をあげ利益を得るための勤労に全霊を傾けるといふ、彼女を取り巻く社会が支持する道徳観にかなう女性である。Chadを連れ戻すというStretherの旅も、彼女の家族の事業の発展に寄与するものであり、与えられた使命のために時間を使うことにとらわれるあまり、パリの魅力を楽しむことに、つまり目的以外のことで時間を無駄遣いすることに彼は良心の呵責を感じるのである。StretherがWoollettの人々を通して感じた時間は、画一化された倫理感や美意識、そして産業資本主義に基づく明確な社会目的を備えた未来に向かって統合されていくという時間観であると考えられる。その中では時間は未来を築くための資金として活用される。

Woollettでの人間関係は、誰は誰の夫であるとか妻であるとかといったように、端的な他者との関係によってしか表現されず、Chadを引き止めているのは性の悪い女に違いないと決め付けられてしまう³。この発想について後にChadは、“Is that...what they think at Woollett?... I must say then you show a low mind!” (101) と指摘している。また最後までその名称の明かされないNewsome家の製品は、ありふれたつまらない「家庭用品」(“object of the commonest domestic use” 48) としか表現されない。こういった人間関係や物などは、それぞれが固有名称を確実に持っているはずでありながら、結果的にはそれらがどんな名称であろうが何の違ひも生じないことを意味し、没個性化し、束ねられゆくWoollettの人々の時間観を象徴する。

事物を形容する語彙に乏しくなりがちで、画一的な発想を持つ人々は、「資本のようにやり繰り」(ボルノー 24)される時間意識に支配されているのである。それは物理的、不可逆的、科学的、目的論的(フランツ 21)に流れる直線的な時間観といえる。Stretherに希薄なアイデンティティーしかもたらさない緑色の評論雑誌は、彼がより心惹かれるフランスの文学を扱うレモン色の書物(“lemon-coloured volumes” 63)と対照されて、Woollettの政治、経済、倫理を扱っており、人々の、社会運営の技術に対する興味や共同体理念に対する高い意識を象徴するといえる。資本貯蓄という社

会に浸透する目的に向けて人々は勤勉で未来志向的であるが、人々の意識を束ねる時間観は彼らの時間のオリジナリティーと自由な想像力の余地を奪っている。

StretherはこのようなWoollettの持つ精神規範や価値観の偏狭さを、常にヨーロッパで思い出し引き合いに出す。まず彼は、堅く古めかしかったMrs. Newsomeの装いと比べてセクシーなMiss Gostreyのファッションに惹き付けられる。このことは彼がヨーロッパに対して抱く解放的な印象を象徴する。またアメリカでの生真面目さを引きずるあまりヨーロッパの社交界も教会も芸術も習慣も拒否し、それらに馴染むことのできないWaymarshと同類に思われることをStretherは心外に思う。さらに何もかもすばらしい(“so grand” 48)と思われるパリの劇場では、Stretherは、Newsome家の製品など場違いで口にすべきではないと考える。つまりまるでStretherがとらえるアメリカの時間観の産物はヨーロッパにおいてみっともないものであるかのように表現されているといえる。

このようなアメリカの印象の描写は、Jamesの初期の作品において描かれたものとは相違しているといえる。*The Ambassadors*において扱われるアメリカは、例えば*Roderick Hudson* (1875)におけるニューイングランド社会の描写と比べて、同じように共同体社会における精神規範の存在が描かれていながら、明らかに人々のアイデンティティーを擁護する要素を欠いていることが分かる。例えばRoderickの後見人であるRowlandが見たNorthamptonの素朴で平和な人々の暮らしは次のように表現されている。

...the happiest lot for any man was to make the most of life in some such tranquil spot as that. Here were kindness, comfort, safety, the warning voice of duty, the perfect absence of temptation⁴.

ここに描かれるNorthamptonの社会はやはり人心を束ねる倫理や閉鎖性を持つ。しかしここでの精神規範は、人々の時間を抑圧するものではない。それはむしろ人間を価値観の混乱から守り、彼らの精神の平和を確保してくれるものとして描かれている。

このようなJamesのアメリカの印象の変化は、当時のアメリカの都市整備運動の進行と、そこでの人々の時間観の変化、そして両者の密接なかかわり合いの一つの反映であるといえる。鉄道の建設によって地域の連絡と都市の整備は進み、アメリカではJamesがその後二十年間アメリカを離れることになる1883年に、“standard time”が導入された。時間どおりに行動する必要と社会の関係についてDouglas Tallackは次のように書く。

The regulation of time is usually associated with an urban environment but while it is true that city life multiplied interactions and so necessitated the

standardization of time (the need to be ‘on time’), the impetus came from economic and technological sources⁵.

時間は時刻を表す数字によって名称を与えられ、客観的对象物化される。そしてその時間が、社会理念と強く結び付くにつれて、社会に特有の時間観が形成され、時間は一刻一刻確実に違う固有の時刻を備えながら、時の重みは没个性的に均一に、同じ目的のために使用される資本の一つとして数えられ、束ねられることになる。すべてが“数えられる”という価値観の存在についてTallackはさらに次のように書く。

Products, services, labour, time, and space—all are given a numerical value through the agency of money so that they can be ‘taken into account.’ Neither capitalism nor money are themselves sufficient to explain the consolidation of a rationalized culture; rather, they are part of an interlocking and developing system (itself a key concept by the early twentieth century)⁶.

Tallackの言う“システム”の中において人々は、そのシステムを構成する一部としてのアイデンティティーを持つ。そしてChadを連れ帰りシステムに貢献させるというStretherの使命は、このシステムにおける彼のアイデンティティーの主張を意味することになる。システムの一員としての人々の勤勉さは、元来、いかなる社会理念の枠組みの中でも、自分の存在意義や生のオリジナリティーをつかみたいとする人間の本能的な欲求によるものである。しかしシステムを構成する権威によって与えられるアイデンティティー、つまりWoollettの使者としての役割、そしてその役目が達成されれば与えられることになるChadの継父としてまたMrs. Newsomeの夫としての役割はますますStretherを“外部時間”の権威に従属させることになり、彼自身の「生」の実現から遠ざけることになるのである。

II

ヨーロッパにきたStretherはアメリカでは経験できなかった時間のゆとり (“so rich a consciousness of time” 76) を楽しむ。Woollettの習慣を引きずる彼にとって、楽しみの時間は“貯め”られたり、“a bag of gold into which he constantly dipped for a handful” (76) といった金銭のイメージによって表現される。このような時間を資金と考えるWoollettの時間観のオブセッションに影響された価値観が、Stretherの時間に対する意識の敏感さもまた導き出していることは注目に値する。Stretherは若い時に妻とヨーロッパ旅行に行った際、その旅行を単なる娯楽ではなく、そこで得た教養を未来への投資にしたいものと考えたのである。彼の過ごした時間は未来につ

ながら“a good harvest” (62) であるゆえに“sacred” (62) であり、彼はこの時間の意義を大切に育てていこうと誓った (“his theory...had then been to preserve, cherish and extend it” 62)。そしてこの思い出を甦らせるかのように彼はパリに流れる時間に敏感に反応するのである。彼はヨーロッパにおける時間観がアメリカにおける時間観とは全く違う (“things quite other” 61) のものであり、新しい価値観の存在 (“the presence of new measures, other standards, a different scale of relations” 77) を素早く感じ取ることができる⁷。

Chadの友人little Bilhamは時代に逆行する芸術家稼業 (“an occupation declined” 84) をめざしているが、創作につまづき特に何かに係わることなくパリの芸術や娯楽に興じながら過ごしている。またMadame de Vionnetは非常に国際的で複雑な経歴を持つ。彼女はイギリス人の母とフランス人の父を持ち、いくつもの外国語が操れ、先祖から受け継いだ、“the air of supreme respectability” (146) の漂う歴史的な遺品に囲まれて暮らしている。彼女の容貌はStretherに、“a notion of the antique, on an old precious medal, some silver coin of the Renaissance” (160) を連想させ、彼女がその背後に持つ歴史 (“revelation of her heritage” 174) を彼はオーラのように感じ取る。さらに、little BilhamによってStretherに紹介されたMiss Barraceは前世紀の才媛の肖像 (“some last-century portrait of a clever head” 76) を彼に思わせ、芸術家Glorianiの庭園は時代の波に流れ去ることのない“a strong indifferent persistent order” (119) を感じさせる。また彼はMadame de Vionnetの娘Jeanneを、“a small old-time princess of whom nothing was known but that she had died young” (154) のように感じる。そしてStretherにヨーロッパを案内するMiss Gostreyには、さまざまなヨーロッパの事物を経験し、鑑識眼を養ってきたという風格 (“the air...of having seen and chosen” 21) を彼は感じる。

このようにStretherの会会う人々は、その人生や人柄に動かしがたい指標となる時間の記録、つまり過去の歴史と伝統の存在を備えている人物ばかりである。固有の事象によって記憶された時間はアイデンティティーを持ち⁸、人々は様々な独自性を持つ過去の時間を意識して生きる。パリにおいてStretherが感じ取った時間観は、共同体理念に向かって前進することを強いられることなく、時に倦怠を伴いながら、無数の過去の時間へと向かって意識を分散していくという時間観である。Stretherもまた人々の人生を感じ取ることによって時空を越えてその想像力を広げ、ポール・リクルールの言う「忘却」のようにWoollettの時間の価値観から離れる⁹。

Strether自身が過去の時間を“内部時間”として生きることを可能にしたのが、“virtuous attachment”と表現されるChadとMadame de Vionnetの関係である。彼は

Chadに、自分自身の過去の可能性を重ねる。Chadのすばらしい成長ぶりから判断して、未来に向かって統合される時間が、過去に向かって分散する時間と出会うことにより、別のより高次元で人間性を高めてくれる時間観が生まれるのではないかとStretherは考えるのである。このことは、StretherがChadの変化を“fortunate development” (279) と語る場面や、二人の関係が他人であるStretherに青春をもたらす力を持つということを発見した彼の、“Yes, they’re my youth…” (197) という言葉において読み取ることができる。彼の経験する時間はジョルジュ・プーレの言う「他人の中におのれを所有し、その短い自己所有の中に唐突な享楽を見出す」時、また、「魂が突然おのれのなかに過ぎ去ったある過去の再生を感じる」(プーレ 30) ような瞬間とも言える。彼は二人の関係を独自に解釈し、異種の時間観を融合することにより自ら作り出した時間を体験し、“生きて” いるのである。

彼が常に感じていた時間の他者性はこの瞬間には打ち消される。彼を取り巻く“外部時間”と、彼の意識が生む“内部時間”は“virtuous attachment”によって生み出された時間観の中で、一致するのである。それゆえ彼の若返りの描写は、彼が傍観にとどまらず実際に青春を生きていることを示しているといえよう。後に二人の関係の現実の姿を知った彼が再び年老いた者として描写されるのは、彼の“外部時間”と“内部時間”の再度の分離を意味する。“virtuous attachment”という関係は、Stretherにもたらされる新たな時間の意義をアイロニカルな意味をも伴って示している。つまりそれは彼が彼自身の時間と人生を「生きる」ことを可能にした、彼にとって高尚な時間意識であり、また現実存在するには高潔すぎる時間意識なのである。

ChadとMadame de Vionnetの現実の姿を知ったStretherは、結局のところ、Woollettにおける時間観とパリにおける時間観は別のものであるとして存在しているのであり、新しい高次元の意義を生み出す働きかけなどし合っていないことを悟る。誰と交わってもChadはChad (“he was none the less only Chad” 322) に過ぎず、Woollettの未来に役立つ広告技術に惹かれ、Woollettの時間観を持って生きる人間なのである。また、Stretherにまばゆい魅力を投げ掛けたヨーロッパの事物は、もはや色褪せたものとなる。それらは、“old, old, old, the oldest thing” (318) と表現される。パリの時間観は過去におけるオリジナリティーを持ってはいても、現在において独自性を持った時間を生み出すものでも、Chadのような青年を本当に引きつけ変えるものでもないのである。そしてStretherは過去の時間が持つ現実としての苦悩や人間の自由を抑圧する負の側面を知る。Stretherはパリに華やかな外観の裏側に存在した血なまぐさい革命の歴史 (“odd starts of the historic sense” 317) を感じる。また、処刑されたMadame Rolandを彼に連想させるMadame de Vionnetが、いかに伝統や因習という名のもと

にある過去の時間によって人生を左右され、他者性を持った“外部時間”に調和することを強いられているかという事を、Stretherは恐ろしく思う。この様子は、“...it was like a chill in the air to him, it was almost appalling, that a creature so fine could be, by mysterious forces, a creature so exploited.” (322) と描写される。Madame de Vionnetもまた、形こそ違っても、未来に向かう時間観に調和することを強えられるWoollettの人間と同じように、過去の時間における価値観によって現在の生き方を支配されているということが言えるのである。

それらを認識したStretherは、身代わり経験により他人の時間に自分の意に沿う人生を投影することなど不可能であるということ、つまり、彼の理想とする時間観をそのまま演出しその存在をうらづけてくれる他者などいないことを悟る。それゆえ彼は、“lonely and cold” (313) と感じるのである。また彼はすでにMrs. Newsomeの信用を失い、アメリカの使者としての役割を失っている。つまり彼はWoollettの時間観におけるアイデンティティーを失っているということである。その結果、彼は以前よりも一層失い、一層孤独である。そして彼の経験を通して、彼の“内部時間”を実現する時間観というものが、いかに瞬間的であり、また流動的なものであるかということが示唆される。これが彼が一連の経験を経た後に行き着いた現実なのである¹⁰。

だがこの現実には彼自身の意志が加担して導かれたものであり、彼がそのことを自覚しているという点に着眼したい。彼はまるで「女の子が人形に服を着せるように」 (“as a little girl might have dressed her doll” 313) 自分の判断力に自己暗示をかけ、二人に利用されたというよりは“virtuous attachment”の独自性を彼自身が信じたかったから信じたのである。それ故、彼の幻滅の経験は、表層的な要素にすぎない。結局彼が“virtuous attachment”に対する憧れと幻滅を通して自覚することは、他者の時間観ではなく自分が作り出した時間観を生きることに対する欲求なのである。彼は自分の“内部時間”に目を向ける。つまり、彼の希求する生とは、“内部時間”の実現を意味し、そのためには彼は、時間の他者性や“外部時間”との不調和から脱却する必要があるといえる。

III

時間意識を「現在」へと立ち返らせたStretherは自分が、画一化され統合される時間観にも、過ぎ去った時間の記録へと分散していく時間観にも調和できない存在であることを自覚する。このことについてStretherはMiss Gostreyに、“I’m not...in real harmony with what surrounds me.” (341) と語る。もはや“外部時間”に翻弄され

ることを拒否するStretherは、彼がそれまでに経験した時間観のいずれにも属さない存在であるということに自覚しているのである。それゆえ彼は孤独であり、また不安定な立場にある。これが彼の「現在」における現実である。だが彼のこの現実において、“外部時間”に抑圧されることのない、独自の時間であり独自の「生」は可能になる。共同体の外部者とは、「存在を保持するために必要な諸限界を侵すことによって初めてその本質を立証できる」¹¹存在であるとすれば、Stretherはまさにいずれの時間観にも調和できないという発見によってそのアイデンティティーを示している。彼はWoollettの未来へと流れる時間観、そしてパリの過去へと散らばる時間観の両方を認識し、それらから最大限に距離を置いた点、すなわち彼自身の現在の意味に意識を向けるのである。

Stretherがこのパリへの旅を通して体得したことは、謳歌することができなかった過去に対する憧憬でも後悔でもなく、多くの挫折を重ねた55才の彼が生きる「現在」という時間の意義、そして彼自身の「生」に対する切望に他ならない¹²。彼がlitte Bilhamに言う、“Live all you can....” (132) という言葉は、Strether自身の「生きたい」という欲求を示すと考えられる。ChadとMadame de Vionnetの、そして二種の時間観の“virtuous attachment”は、Stretherに彼の時間経験をより包括的な視野から把握するための精神的な高みを与え、彼を彼が立たされている「現在」という時点の意味の発見へと導いている。

アウグスティヌスの「過去についての現在とは記憶であり、現在についての現在とは直感であり、未来についての現在とは期待」¹³であるという時間観、また三宅剛一の「意識は現在中心で過去と未来は現在から見られるのである」とする指摘は、すべての時間の意味を創出するのは「現在」であることを示す¹⁴。Stretherのすべての時間経験は「現在」における彼の「生」の意味を構成する要素として融合されることになる。彼の時間意識は、他者性を持つ時間に流されたり、あるいはそれを傍観するという時間観から、「現在」という彼だけの存在点において、二種の時間観も、過去も未来も、彼が創出する“内部時間”として把握するという現在中心の時間観へと変化すると考えられるのである。それゆえ彼は二つの時間観が表象する二つの文化に対して、いずれの内住者にもなることなく、Madame de Vionnetを理解することができ、またMrs. Newsomeについて、“I do what I didn't before—I see her.” (343) と言うのである。

Heideggerが、「過去と未来を結び付けるこの今は同じものであり、しかも常に異なっている」と考えるように、「現在」は、唯一のものでありながら、絶え間なく変化する。Stretherが“virtuous attachment”を通して知った、自分が生きたいと思う時間の流動性と瞬間性は、「現在」性の意味と重なり合う。死が永遠であり、生は一瞬である

ことと相関して、「現在」という二度とない時間の持つ瞬間性と唯一無二性にこそ「生」は存在することをStretherは認識する。“内部時間”を生きようとする意志に正直であるために、すなわち、彼に必要な時間が「正しくあるために」(“To be right” 344) 彼はパリを去ることを選ぶ。彼の時間意識において時計の針は「過去」から「現在」へと戻されるのである。そして、Stretherにとって、彼の人生に付きまとう不安や孤独は、彼のそれまでの、不幸や挫折の一部としてではなく、「現在」性の、そして「生」の尊厳に伴う必然の要素としての意味を提示し始めるのである。

Stretherがこれからどこに行き何をするのかは描かれてはいない。彼に“To what do you go home?” (344) というMiss Gostreyの問いに対して、JamesはStretherに“I don't know. There will always be something.” (344) と答えさせている。この答えには、「現在」という彼の存在点は常に存在しながら、その瞬間性と不安定さのために、彼がこれからもずっとこの問答を自分の中で繰り返していくであろうことと、同時に、彼が生きるべき時間は、それが後に幻滅を伴ったとしても、「現在」という時点独自の価値であり、「生」を持つという確信もまた存在するということが示されている。そこにはJamesのexpatriateという立場に対する意識もまた重なると考えられる。Jamesは1877年8月にGrace Nortonに宛てた手紙の中で、コスモポリタンとして生きる心情を孤独(“alone”)であると書いている。Stretherの孤独には、やはりJames自身の孤独の心理の投影が読み取れるといえる。

IV

Stretherの新たな時間観と現在認識には、彼が他者の内に自分の存在を投影し、いわばプーレの言う「永遠の一瞬間」¹⁵の中に自分の「生」を所有するというロマン主義的とも言える時間の奇跡を経験しながら、その奇跡的な時間に対する幻滅を経験することもまた不可避な要素となる。Stretherの新たな時間観の認識に必要とされる奇跡と幻滅には、Jamesの両義的な時間意識の片鱗もまた重なると考えられる。すなわち“内部時間”の実現をもたらした、他者の時間の功績の認知と、それへの幻滅、そして自ら作り出す瞬間的な時間にしか「生」は存在しないという現実を次々に描くことにより、Jamesはロマン主義的で定式化した時間の奇跡を意識しながら、それを崩し、彼が創出する時間観の中での孤独な「生」の現実をクローズアップするのである。この過程には、Jamesが一つの時代におけるヨーロッパやアメリカに対して抱いた文化観とそれらの関わり合いは、時代を越える一種恒久的なイメージとして彼のテーマであり独自の世界観、そしてアイデンティティーを彼にもたらし続けてくれるものであった

ということと、同時に、絶え間ない時間の変化に対応する文化間の新たな関係を模索し、時代を回転させようとするJamesの探求心もまた示唆されるといえよう。Woollettの変化を語る場面でStretherは、“Woollett too accommodates itself to the spirit of the age. . . . Everything changes, and I hold that our situation precisely marks a date. We should prefer them blameless, but we have to make the best of them as we find them.” (55) と言う。この言葉は、実際に数年後にアメリカを再訪したJamesのアメリカにおける時間観の急激な変化を予示するものとも考えられる。

Jamesの「生きる」ことに対する探求はこの作品以前の作品においても繰り返し様々な形で語られてきた。例えばこの作品と同じ頃にかかれた*The Wings of the Dove* (1902)においては、Jamesは主人公Millyを、肉体的には亡くなった後も、他者の記憶の中に残る絶大な存在感によって、他者を支配する力を持って「生きる」人物として描きだす。「傍観される人生の時間」のテーマは、より広い視点から「掌握」される時間として、また、人物の「生」のオリジナリティーを浮き彫りにする時間としての意味合いを備えるものへと変遷を遂げ、人間と時間の概念のかかわりの意味の変化がうかがえる。そしてこの*The Ambassadors*において先鋭化されているテーマも、もはや傍観される時間ではなく、他者性を持つ時間から脱却した視点から、既存の時間観の“expatriate”的な立場においてStretherが現実的に「生きる」時間である。Stretherが認識するにいたる、すべての時間と「生」を内包するという「現在」性の意義は、常に「生」の可能性を追求するJamesの試みの一つの到達点を示唆するとも考えられる。Stretherにもたらされた新たな時間観が表象するものは、expatriateとしてのJamesがとらえる「生」の形の豊かさといえよう。既存の時間観のもとで生きることの自由を抑圧されることなく、それらの時間観からの“expatriate”として独自の時間観を持つことになるStretherには、新旧両大陸の文化間の新たなかかわり合いの意味、つまりそれらの“virtuous attachment”を追究するJamesの姿勢の片鱗もまた重なると考えられるかもしれない。

付記 本論は、第39回日本アメリカ文学学会全国大会（於 同志社大学 2000年10月14日）において口頭発表したものに基づいている。

注

- 1 以下、この小説からの引用は括弧内にページ数を示す。
- 2 このことはStretherが自分のそれまでの人生を、“I seem to have a life only for other people.” (160)

- と語る言葉からも読み取ることができよう。
- 3 Louis Auchinclossは、Mrs. Newsomeとその娘Sarahのものの考え方を次のように述べている。“Their failure to see anything but vileness in Madame de Vionnet, or meretriciousness in the French capital, is also their failure to make anything out of the business of human existence but the few paltry rules of what they choose to call right and wrong.” Auchincloss 135.
 - 4 Henry James, Roderick Hudson, 92.
 - 5 Tallack 13.
 - 6 Tallack 11.
 - 7 Allen W. MentonはStretherが、アメリカで暮らしてきた自分とパリで暮らす芸術家Glorianiに対して流れる時間の違いを次のように感じ取っていると述べている。“...living in the Paterian ecstasy of an eternal “moment” had saved Gloriani’s face from the ravaging effects of time and allowed him to sculpt the lines of his own face as surely as an artist might paint his won portrait. In contrast, time has marked Strether’s face in a notably unflattering fashion.” Menton 292.
 - 8 Albert A. Dunnは、“Memory, then, becomes a repository of value.”であると述べる。Dunn 95.
 - 9 リクールは「旅」の効用を次のように考える。「時の流れは忘却の川だと言われる。しかし旅の空気もそれに似た飲み物で、効き方は時の流れほど徹底的でないにしてもそのかわりいっそう速やかに効く。」リクール 215. Stretherも、リクールの考える旅の効用を受けていると考えられる。
 - 10 Sallie Searsもまた次のように指摘する。“...he [Strether] at first clings to the belief that he can have the best (and none of the worst) of both worlds; then, undeluded, he renounces both.” Sears 128.
 - 11 山口 第四章参照。
 - 12 本論では、この小説において主眼となるのは失われ手遅れとなった人生や時間ではないという立場に立つ。Merle A. Williamsも次のように述べる。“The force of *The Ambassadors*...is to show that it need not be too late to go forward: to learn to see, to appreciate, and to judge.” Williams 81.
 - 13 リクール 17 参照。
 - 14 Dunnは、テキストに多出する“now”に注目することにより、この小説における「現在」の重要性を議論している。“The emphasis in the last few chapters upon the word *now*—it is several times italicized and occurs quite frequently in Strether’s scenes with Madame de Vionnet, Maria, and Chad—indicate the importance of the present.” Dunn 95.
 - 15 プーレは、「瞬間のなかに彼（人間）の生を所有する」という奇跡を、ロマン主義の根本的主張であると考え。プーレ 30.

Works Cited

- Auchincloss, Louis. *Reading Henry James*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1975.
- Dunn, Albert A. “The Articulation of Time in *The Ambassadors*.” *Modern Critical Interpretation: Henry James’s The Ambassadors*. Ed, Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1988.
- Edel, Leon, ed. *Henry James Letters*. Vol.2 and 3. Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press, 1980.
- James, Henry. *The Ambassadors*. “A Norton Critical Edition”; New York: W.W. Norton & Company, 1964.

——. *Roderick Hudson*. Harmondsworth: Penguin Books, 1986.

——. *The Wings of the Dove*. “A Norton Critical Edition”; New York: W.W.Norton & Company, 1978.

Menton, Allen W. “Typical Tales of Paris: the Function of Reading in *The Ambassadors*” *The Henry James Review* 15 (1994): 286-300.

McWhirter, David. *Desire and Love in Henry James: A Study of the Late Novels*. Cambridge: Cambridge University Press, 1989.

Sears, Sallie. *The Negative Imagination*. Ithaca: Cornell University Press, 1963.

Tallack, Douglas, *Twentieth-Century America: The Intellectual and Cultural Context*. New York: Longman, 1991.

Williams, Merle A. *Henry James and the Philosophical Novel: Being and Seeing*. New York: Cambridge University Press, 1993.

マーティン・ハイデガー 「存在と時間」上・中・下 桑木 務 訳 (岩波文庫 1990)

マリー・ルイゼ・フランツ 「イメージの博物誌 12号: 時間——過ぎ去る時と円環する時」 秋山 さと子 訳 (平凡社 1992)

ジョルジュ・ブーレ 「人間的時間の研究」 井上 究一郎 他 訳 (筑摩書房 1975)

O.F.ボルノー 「時へのかかわり: 時間の人間学的考察」 森田 孝 訳 (川島書店 1975)

三宅 剛一 「時間論」(岩波書店 1976)

山口 昌男 「文化と両義性」(岩波書店 1975)

ポール・リクール 「時間と物語 I ——物語と時間性の循環 歴史と物語——」 久米 博 訳 (新曜社 1990)

渡辺 二郎 「ハイデガーの実存思想」(勁草書房 1985)

Synopsis

The time to be integrated, the time to disperse and the “virtuous attachment” of time
: Strether’s sense of the “present” in *The Ambassadors*

Satoko Nishida

In *The Ambassadors* Lambert Strether, who comes to Europe to take Chad back to America, knows the “virtuous attachment” between Chad and Madame de Vionnet. If we think the word “virtuous attachment” to mean Platonic relationship, it is said that Chad and Madame de Vionnet don’t associate with each other “virtuously.” But Strether thinks their relationship to be the embodiment of two kinds of sense of “time.” The aim of this essay is, through analyzing how Strether feels two kinds of sense of time, to consider the meaning of the life and of the “present” for him.

In America, the people around Strether work hard in the developing capitalism. What is important for them is the time to save money for “future.” The name of the commodity in Newsome’s factory is unknown, because it doesn’t need to be identified. This fact symbolizes that the people lose individuality in their daily lives, and that both they and their time are parts of the capital in their society. On the other hand, Strether enjoys history and tradition in things European. He feels that the people in Europe have their own “past” time, and that their past marks their individuality. And for Strether, the relationship between Chad and Madame de Vionnet embodies the attachment of two kinds of “sense of time,” that is, the American sense of time minding their common “future” and the European sense of time minding their individual “past.”

In the end, Strether realizes that he is an outsider from both kinds of “sense of time.” That is, he, as well as Henry James, cannot become familiar with both America and Europe as an expatriate. Through his travel, he knows the importance of the “present” time, for it is the unique time point to live and to grasp both the “past” and the “future” of his own.